世界青年の船が繋いだ、たくさんの国境を越えた絆

第18回　「世界青年の船」事業

JICA 静岡県国際協力推進員×武馬 千恵

≪主な略歴≫

	愛知県名古屋市出身
2005年	内閣府の世界青年の船事業に参加
2006年	株式会社 JTBグローバルマーケティング＆トラベルにて訪日外国人の旅行手配を担当
2008年	青年海外協力隊　村落開発普及員としてセントビンセントおよびグレナディーン諸島へ赴任
2012年	JICA静岡県国際協力推進員として、静岡県内にて国際協力を推進する業務を担当

事業で得たことは何ですか？

13ヶ国の参加者との船内生活では、旅行では知ることのできなかった各国の文化や習慣など、体験から学ぶことができました。遠いと思っていた世界が一気に近くなり、たくさんのかけがえのない仲間が出来ました。

当時は英語にコンプレックスがあり、頭で考えては「文法が違うかも…」となかなかうまく使うことが出来なかったのですが、目の前で起こる一つ一つのことに反応していくうちに、とにかく伝えたいと思う気持ちが大切で、言葉は気持ちを伝えるツールで、大切なのは相手に伝えたいと思う気持ちだと実感しました。またそれぞれの違いを認めることで相手を認めることにつながり、人と人との関係を築く上で大切なものだと学ぶことができました。

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

ディスカッションコースでボランティアを選択していたことがきっかけで、ボランティアに参加したいと思い、青年海外協力隊に参加しました。現地ではやはり文化の違いがたくさんありましたが、船での経験があったため、「違いを楽しむ」ことができ、現地の方との関係構築に役に立ちました。帰国前には違っていた文化にすっかり溶け込み、料理を教えていた女性グループメンバーに「チエは誰よりもビンセンシャンだね。」と言われ、うれしかったのを覚えています。

帰国後は途上国のことや国際協力の世界を多くの方に知ってほしいとの気持ちから現職に就いています。イベントや講座などの企画運営をしていますが、途上国の問題点だけでなく、その国の魅力や文化の違いなどポジティブな部分を合わせて伝えるようにしています。国際交流の世界から国際協力へ、そして現在は国際協力の現場を発信する立場として、「どこに住んでいても同じ人間だけど、たくさん違いもあるからおもしろい」ことを多くの方に伝えられたらと思います。

これからやりたいことは何ですか？

青年海外協力隊の訓練中にある限界集落の方にお会いしました。衝撃的だった「日本の農業はもう一杯一杯なんだ。」という言葉。セントビンセントでは地域を愛して良くしていこうと地元の女性グループが頑張っていく姿を見て、将来的には日本の中山間地域の魅力を発信したいと思うようになり、現在の仕事が任期満了となる2015年5月に静岡産の果物とフェアトレードスパイスを使ったジャム工房兼、中山間地域の魅力を発信するカフェをオープンする準備をしています。ジャムづくりはセントビンセントで学んだことなので、現地の経験を活かせることがとても嬉しいです。将来的には海外の方への中山間地域の紹介をしたいと考えおり、地域と世界を繋ぐことが出来ればと考えています。

事業参加をきっかけに、開発援助×人材育成に関わることに

第16回　「世界青年の船」事業

青森県　×　木村　大輔

≪主な略歴≫

1978年	青森県弘前市出身
2004年	内閣府「第16回世界青年の船」事業に参加
2004年	大学卒業後、青少年教育、金融業界へ就職
2006年	英国オックスフォード大学国際開発学部大学院に留学
2008年	「第20回世界青年の船事業」環境コースファシリテーター オーストラリア国立大学公共政策大学院に留学
2009年	コンサルタントとして国連開発計画(UNDP)での勤務や、（一財）青少年国際交流推進センターでプログラムコーディネーターを務める 「第22回世界青年の船」事業国連コースファシリテーター、「第38回東南アジア青年の船」事業日本・ASEAN関係コースファシリテーター等を務める。 第17回、第19回「国際青年育成交流」事業副団長を務める。
現在	青森県庁勤務 青森県青年国際交流機構会長 （一社）グローバル教育推進プロジェクトメンバー 青森中央学院大学地域マネジメント研究所客員研究員

事業で得たことは何ですか？

９．１１のテロ後に国際情勢に興味を持つようになり、多国籍な環境に身を置き、本音ベースで国際問題について語り合いたいと思うようになり、事業に参加しました。

事業で得たことは主として3つありました。一つは宗教や人種に対するステレオタイプが相当払しょくされたこと。イスラム教の宗派の違いや日本人に対する印象等について無知である自分に気づかされたことです。

二つ目は、貧困等国際的な課題の現実を見たことです。ムンバイでのストリートチルドレンとその理由となる社会的・文化的背景の複雑な事情を知ったことで、自分が恵まれた環境にいたことに気づきました。

最後は、国籍や人種が違えど、同じ人間であると再認識できたことです。皆苦しみや幸せを抱えながら生きている。「外国人」という意識より「個人」という見方ができるようになり、世界が近い存在となったことです。

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

参加するまでは海外に興味がそれほどなく海外経験も殆ど無いに等しかったのですが、事業に参加し、様々な国の青年と膝を合わせて話し合ったこと、訪問国活動において要人との会談ができたことで、「国を代表する」という重みを知ると同時に、民間レベルでの国際理解、平和構築に携わりたいと思いました。

また、訪問国活動が開発途上国であったことで、それまで本の中の話だったことが現実として目の前に来たことで、開発援助が「自分ごと」となり、大学院留学を目指し国際開発やその根本にある人材育成にコミットしようと目指すようになりました。

幸運なことに、その後は事業の指導官などの指導の下大学院留学の目標を叶えることができ、開発援助や人材育成の現場に立つ仕事ができました。

さらに、いつかはファシリテーターとして事業に戻り、参加青年の人生の変わるきっかけ作りに関わりたいと思っていましたが、それも実現しました。

今では外国に全く抵抗なく動き回るようになりました。そして今でも内閣府事業から多くの機会と刺激を受けています。

これからやりたいことは何ですか？

若者の育成を中心に、大都市だけではなく、地方や開発途上国において相互理解を進める活動や、未来を担う世代が自己肯定感を持って自分の目標に向けて積極的にチャレンジできるように、産官学協働しながらシステムを作る活動をしたいと思います。

また、日本における多文化共生に向けた社会システムの構築に向けた研究活動を行い、日本の国際化や国際貢献活動に向けた基盤整備を行いたいと思います。

事業で経験したことや得たネットワーク、留学や仕事で得た専門性をフル活用し、常に人の役に立つ人材となるために自己研鑽を行い、将来的にリーダーとして活躍できるように頑張りたいと思います。

ここから世界に繋がった
日本と世界の架け橋を目指して

第23回　「世界青年の船」事業

大学職員　国際交流課　×　壹岐　香菜

≪主な略歴≫

宮崎県宮崎市出身

2011年　内閣府第２３回世界青年の船事業に参加

2012年　青年海外協力隊に参加（任地　ネパール）

2013年　内閣府第２５回世界青年の船事業にボランティアスタッフとして参加

大学職員　国際交流課・学生支援課に勤務

事業で得たことは何ですか？

各国それぞれに比較することの出来ない素晴らしい面があることを直に学ぶと同時に、習慣や言葉が違う人間が互いを理解していくプロセスの大変さと喜びを知ったことは最大の収穫であった。一つ一つの文化には決して一つの尺度では測ることが出来ない、重層的な厚みと奥深さが感じられた。また各国青年との交流を通して、大きな気づきがあった。それは、‘多様性は美しい’という心からの実感である。もし世界が単一の文化、宗教、音楽、政治体制だとしたら何と世界は寂しく色あせて見えることだろう。グローバル化が急速に進む現代、それが単一の文化や考え方を押し付けるものではなく、自国の文化を大切に想うのと同じように、相手の文化や価値観を尊重するものであるよう、自分もその一端を担っていきたいという決意にも似た気持ちが芽生えたことは、その後のキャリア選択にも繋がった。

事業の経験は、その後の人生にどのような影響を与えましたか？

世界青年の船を通して、実際に異文化での葛藤や、異文化理解の大切さを経験したことは、その後青年海外協力隊として途上国ネパールで暮らす中でも多いに役立ち、進路にも影響を与えた。ネパールから帰国後は、第25回世界青年の船に乗船ボランティアスタッフとして参加し、国内の寄港地活動の企画・運営に携わった。東日本大震災の被災地を寄港地として初めて訪問し、各国青年と東北の人々の復興への想いや歩みを直接聞けたことは強く印象に残り、国際交流・協力が果たす役割や意義を改めて考える機会となった。現在は大学において、留学生の受け入れ、海外留学を支援する部署（国際交流課）に勤務している。

【写真　上】
活動地ネパールシンズリ郡にて。
現地での生活をいつも支えてくれたお姉さん的存在。彼女の優しさや気遣いに支えられた。

これからやりたいことは何ですか？

世界には多様な価値観があることを知るたびに私は同時に日本、そして自分自身を深く知るような感覚になることが多々ある。日本の地方にいる若者をはじめ一般の人が異文化に直接触れる機会は都会と比べると少ない。異文化に触れることは決して楽しいことばかりではなく、葛藤や悩みに繋がる事もある。しかし国も文化も言葉も違う人間同士が、対話を通し互いを理解していくプロセスには、それに勝る喜びがある。これからも微力ではあるが日本と世界の架け橋となり、世界に広く目をむける機会を地方にも作っていきたい。その為に私自身もこれからも異文化との出逢いを重ね、その経験を伝えていきたい。